

## 会員紹介：鈴木宣行さん

### 私の略歴



(センベヌ・ウスマン監督と)

1950年岡山県倉敷市生まれ。1974年京都外国語大学大学院仏語学専攻卒業。1989年4月創価大学助教授として赴任。1991年4月創価大学アフリカ研究センター所員を兼任し、西アフリカ仏語圏地域研究に従事。1994年10月在セネガル日本国大使館専門調査員として赴任(～1996年9月)。帰朝後、1998年4月創価大学教授。2006年10月ダカール大学(UCAD)客員教授としてセネガル社会文化研究に従事(～2007年3月)。2011年4月創価大学 World Language Center 教授。2020年3月創価大学定年退職。同大学名誉教授。

### 京都での学生時代

高校時代、第一志望の大学ではフランス語を学ぼうと思っていたのですが、「まず大丈夫」と言われていた第一志望の大学に見事に不合格となり、1968年4月に京都外国語大学フランス語学科に入学。当時、大学紛争真っ只中での京都での学生生活。同年5月にはフランスで「五月革命」が起こり、その後、大学もロックアウト状態になってしまいました。京都市内でも殆どの大学で同様の措置が取られ、「学生紛争」一色。授業も殆どがレポート提出という悲惨な状態。私の所属する大学でも社青同や社学同など反代々木系のグループが結成され、あの「あさま山荘事件」や「大菩薩峠事件」、更には「日航機ハイジャック」などでその名が知れ渡った「日本赤軍(後に、「連合赤軍」と称した)」の学内グループも結成されました。そこには、同級生の女性も参加していました。私も祇園の円山公園などで行われた集会にもよく参加し、機動隊に追いかけられたものです。

この時期、よかったのは、講義がなかったことで、沢山の書物に触れることができたことです。「ジーパンの後ろポケットに岩波新書を入れておかなければ学生ではない」というのが当時の下駄履き姿の京都の学生でした。四畳半(当時部屋代は月額4,500円で、アルバイトの収入を含め月約15,000円～20,000円で生活)の下宿の部屋は書物でいっぱいになっていました。3回生(関西では、「〇年生」ではなく、「〇回生」と言う)の後半に入った時、就職か大学院進学かを考えていたところ、日本の女性として初めてフランス文学(スタンダード研究)の分野で「仏国国家博士号」を取得された片岡美智先生が東京から赴任されることを聞き、片岡先生の指導を受けたいと思い、1972年4月に京都外国語大学大学院フランス語学専攻に進学。下宿先も右京区竜安寺から左京区一乗寺に転居。そこでは、今でこそ有名なラーメンのチェーン店になった「天下一品」の親父さんが当時、一張りのテントの「店」を一人で切り盛りしていて、花街「祇園」からもお姉さん方がタクシーに乗ってやって来ていました。

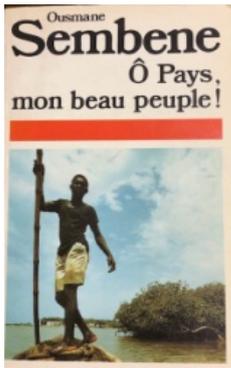
転居した下宿先は、私の他には京大院生と副手の方（物性理論）と助手の方（宇宙物理学）の合わせて3名がいらっしゃいました。3名とも理学部出身の方で、副手の方は「京都産業大学の助教授（現准教授）にならないか？」という話があったにもかかわらず、拒否されました。下宿先の小母さんは「受けなさい。もったいない」と言われていましたが、酒を飲みながら話す機会があった時、ご本人はやはり「京都大学助手のポジションに拘っているんだ」と話されていました。

私が在籍していた当時の京都外国語大学大学院では、片岡先生の他にも当時流行った「新幹線教授」として、慶応義塾大学からフランス文学の佐藤朔先生（この後、先生は慶應義塾塾長や私立学校共済事業団理事長に就任）や白井浩二先生、フランス語学の横部得三郎先生、更に浅見篤先生（兄上は評論家の浅見淵先生）など当時のフランス語フランス文学会の錚々たる重鎮の先生方から直接ご指導いただきました。更に音楽・舞踊の評論家として高名な蘆原英了先生（本名は敏信。藤田嗣治画伯は伯父上）から、フランス文化論の講義でシャンソンの世界でのなかなか聴けないエピソードや話をお伺いできたことはこの上ない宝となっています。

更に、蘆原先生からお招きいただいた東京・代々木の閑静なご自宅の先生の書斎には、床から天井までの棚に驚くほどの数のLP盤が収納されており、奥様手作りのサンドイッチをいただきながら、日仏の音楽界・舞踊界のお話を伺いました。また、蘆原先生からは、当時、設立されて間もない「CBS ソニーに行きたい人はいないか？」と言われ、皆、「CBS ソニーって何？」と思っていたので、手を挙げるものはいませんでした。今思えば、CBS ソニーに入社していれば、「有名(?)な音楽プロデューサー」になっていたかもしれません。私の直接の指導教授であった片岡先生は、女性ならではの視点で論文をきめ細かくご指導してくださり、私の書いたレポートなどは出すもの出すものが多くの付箋付きで、真っ赤になって突き返されてきました。その度に「何で？またか！」という気持ちと「有難い」という気持ちが複雑に入り混じっていました。やっとな片岡先生から「これなら論文として合格」をいただき、1974年3月に大学院を修了しました。そして、京都市内の大学で非常勤講師の職（今のように「博士号取得者」などという条件は付いていませんでした）に就いたのです。しかし今考えると、生活は大変でしたが、京都外国語大学大学院で当時の一流の先生方にご指導いただいたことは本当に良かったと思っています。そして、7年後の1981年4月に母校京都外国語大学に併設されていた京都外国語短期大学に助手として採用されました。

### 国際開発（主に「西アフリカ・フランス語圏地域研究」との出会い

1989年3月まで私は京都外国語短期大学（外国語学部兼任）で、フランス語と留学生に対する日本語教育を担当していました。また、自身の主たる研究として「西アフリカ・フランス語圏諸国地域研究」を行っていました。この研究を始めるきっかけは、京都の私立大学で非常勤講師としてフランス語を教えていた時に、アフリカからの留学生から「この本を読んだことがありますか？」とフランス語版の一冊の本を渡されたことです。



その本はセネガルのセンベヌ・ウスマン著“*Ô Pays, mon beau peuple!*” (写真: 邦訳「セネガルの息子」) でした。その留学生から本を借りて読んでみたところ、ぐいぐい引き込まれていく自分を感じたのです。「セネガルには凄い作家がいる」と思った私は、さっそくセンベヌの作品だけでなく、彼に関する評論などを探したのですが、今のようにコンピュータで検索すれば、何でも出てくるという時代ではなく、日本語のものはもちろん、フランス語の資料も日本には殆どなく、パリから取り寄せて読みました。この時から、執筆する論文も「フランス文学」そっちのけで、「セネガル文学」に傾注していったのです。

当時、周囲からは「どうしてアフリカの文学なんか扱うのか？」と訝しげに見られ、殆ど仲間外れ状態になってしまい、大学に行くのも億劫になってしまっていました。そのような精神状態であった私は、1988年5月に青山学院大学での日本フランス語フランス文学会に参加するため、上京。そのついでに、創価大学を訪問してみたいと思いました。当時、創価大学では、外国人留学生に対する日本語教育について細かく教授されていたので、「ぜひ先生方からご教示願いたい」と訪問の趣旨を同大学日本語研修課程の先生に事前に連絡を差し上げていたのです。私は上述したように京都でも留学生に対する日本語教育を担当していたので、創価大学から了解をいただき、訪問することになりました。創価大学で先生方との懇談の席上、突然国際部長（後年、学長に就任）から「9月から本学に来ていただけないか」との要請があり、驚きました。「学期が始まったばかりなので、9月からは無理です。来年4月からであれば、京都に帰り、所属長に話します」と応え、お暇しました。妻とも相談し、東京行きを決断。なぜフランス語担当ではなく、日本語教育担当で東京行きを決断したのかというと、実は創価大学に「アフリカ研究センター」が設置されるという話を聞いていたからです。

1989年4月に東京に赴任。その後、1991年にアフリカ研究センターが設置され、私も同センターの所員を兼任することになりました。日本語教育と西アフリカ・フランス語圏諸国地域研究の二足の草鞋を履くことになったのです。

赴任後、アフリカ研究センター所員として、まず私の研究地域であるセネガルの在京大使館のシセ大使、ンジャイ参事官（当時のこの参事官は、その後、駐韓国大使や駐中国大使も務められた）を含め、同大使館在勤の方々と親交を深めていきました。その後、同大使館からは、サール大使などに大学で講演をしていただきました。東京に来てからは、「作家センベヌの作品研究を行っているのだから、パリや日本で入手可能な資料での研究だけではだめだ。ぜひセネガルへ行かなければ」との思いが日に日に強くなっていきました。「公に大学を2年ほど休職できる方法はないか」と考えていた時、ジンバブエの日本国大使館に専門調査員として赴任していた同僚が帰朝し、その時に、「外務省専門調査員」の仕事について聴き、外務省に勤務していた方からアフリカ第一課（フランス語圏諸国担当課）に私の専門調査員職についての希望を伝えてもらい、在セネガ

ル日本国大使館に赴任することになったのです。

### 従事した仕事「在セネガル共和国日本国大使館文化広報班」の内容

在セネガル日本国大使館への専門調査員としての赴任は、京都から東京に移った時と同様、「ある日、突然」にやってきました。現在は、外務省専門調査員の募集については、厳正に一次、二次選考試験が実施されていますが、1994年当時の専門調査員の募集は試験もなく、大学助教授（現在は准教授）という肩書のみで、確かなことは言えませんが、ほぼ「一本釣り」だったのではないかと思います。同年5月頃だったと思いますが、外務省アフリカ課の中川幸子という方から自宅に電話がありました。中川さんは退官される前に、確か初代の「駐マリ共和国大使」をされた方です。外務省に赴き、彼女からいろいろ手続きや大使館での仕事内容などをお伺いしたところ、現地での担当は地域班「モーリタニア担当」という話でした。そして、「赴任時期は9月でお願いしたい」とのこと。先に記したように、まさに「突然」でした。つまり、赴任までには4か月ほどしかなかったのです。一応、「大学の所属長に話してみても、できるだけ早くお返事致します」と応えて、外務省を辞しました。

翌日、大学に向かい、所属長にこのセネガル行きの話をしたところ、「わかった。2年間行ってこい」との鶴の一声。「学長の許可は？」と言う私に「所属長の私がOKと言っているのだから、セネガルに行けばいいよ。外務省の仕事で行くのだから」との一言で「赴任決定」でした。同僚に後期の授業をお願いするのが本当に心苦しかったことを覚えています。

いよいよ、派遣の 때가 やってきました。パスポートも初めて手にする緑色の「公用旅券」。成田の出入国管理でも係官から「お疲れさまです。お気をつけて」と激励の言葉。一般旅券の所持では、言われたことのない言葉をかけられ、少々困惑。「有難うございます」との一言だけが口から出ました。

当時はまだ外務省の待遇がよかったので、搭乗したエール・フランス（AF）航空の席は「ビジネス・クラス」。エコノミーしか乗ったことのない者にとっては「貴賓席」のように思えました。パリに一泊、それもホテルはメリディアン・エトワール。当時、「外務省は金があるのだろう」と思いながらも、「これって、税金なんだ」と我に返りました。翌日、私の搭乗したAF718便は午後9時30分過ぎにダカールに到着。ダカール・レオポール・セダール・サンゴール国際空港（市内にあり、現在は民間用として運用されていませんが、ダカール中心街まで車で20分ほどの距離で至便。現在運用されているのは、ダカール市内から車で一時間ほどかかるブレイズ・ディアニュー国際空港）には大使館の派遣員の方が出迎えに来てくださっていました。

翌日、ダカール港に近いアパートの中にあつた大使館（翌1995年4月に、海岸沿いのコルニッシュ・ウエスト通りに面した新築3階建ての現大使館に転居し、私は入居第一期生となりました）に初出勤。初めて見た古ぼけたアパートにある大使館に入った時は、

「これが経済大国の大使館？」と思わずにはいられないほどのものでした。そこで当時の大使とお会いし、仕事についての指示を受けました。大使は私の経歴を見て、「鈴木君には文化広報班を担当してもらおうことにします」と言われました。私の仕事は霞が関で伺っていた「地域班モーリタニア担当」からここでも「突然」の担当替えになりました。この後、文化広報官としての仕事が私のセネガル研究に大きなプラスになりました。

文化広報班の仕事は、基本的には日本に関する情報をセネガル（兼轄国 5 か国を含む）の人々に広く知らしめることが第一です。私は文化広報班で、1) フランス語とウォロフ語による俳句コンクールの開催、2) 「日本映画祭月間」の開催、3) 柔道の大使杯の開催、4) 国民教育省や文化省など各教育・文化機関訪問と懇談、5) 私が始めた在ダカールの三大新聞とテレビ局（公共放送）との月例昼食会、6) 文化無償資金協力（上限 5,000 万円）に該当する優良と考えられる案件の発掘、7) 関係省庁幹部と、セネガルの三大新聞と国営放送などマスコミの関係者を連れての経済協力量ツアー（「経協ツアー」）、更に、8) 日韓で合同開催となった 2002 年のサッカー・ワールドカップ日本招致活動などに従事しました。6) の文化無償資金協力については、以前 SRID ジャーナル第 20 号（2021 年 1 月）にも書きましたが、詳細については後述しますので、ここでは当時の外務省本省の姿勢に大きな疑問を持ったということのみを記しておきます。ただ、この「疑問を持った」ことがその後の私の仕事に対する姿勢を変えたことだけは確かなのです。

また、いわゆる「国際開発」という領域では、上記の 7) 経協ツアーに関わる「日本の援助プロジェクト・サイトを紹介し、如何に日本がセネガルを始めとする兼轄国の地域開発に貢献してきたか」をセネガル国民に知らしめる広報活動がこれに当たるかと思えます。トータルで約一週間に渡って実施したこのツアーの目的は、セネガル各地で日本によって実施された援助プロジェクト・サイトに当該省庁担当官（部長級）と各主要メディアを案内し、それぞれのプロジェクトが如何に当該地域で有効に機能し、当該地域の人々の生活改善にどれほど貢献しているかなどを直接見聞きしてもらい、テレビで放映してもらったり、新聞に写真付きで掲載してもらうなどの工作をすることでした。私はツアーに出発する前の定例昼食会に出席したメディア関係者全員に対して、上述したように訪問したプロジェクトが当該地域の開発並びに住民の生活改善に如何に貢献しているかを、新聞紙上に個別のプロジェクトごとにでき得る限り詳細に、かつ数回にわたって一週間程度かけて掲載するよう、また、テレビ（公共放送）では数回ニュースで流し、しかも新聞紙掲載の記事はなるべく大きく扱ってくれるよう、極めて厚かましく要求し入念にお願いしたのです。ツアー終了後、参加者は私のこの要求にしっかり応えてくれました。大使館での毎月曜朝の定例会議でも結構話題になりました。

また、「日本映画月間」については、ローカル職員と二人で約一か月に渡り、ダカール市内を始め、各地方（最も遠いところへは車で 6 時間ほどかかりました）の中学校、高校やフランス文化センター（CCF）などを会場として、在仏日本国大使館から取り寄せた映画の上映はもちろん、「日本」に関する地理、歴史、「現在」の社会状況、更に「な

「なぜ日本がこれほど発展したのか」などについて、日本の姿、日本人の教育観、価値観などを通して講義も実施しました。「映画はもちろんですが、彼らが学ぶ「日本の歴史」に少なからず問題があり、この点を指摘しながら講義を進めた結果、「日本がなぜ発展したのか」ということについて、生徒たちの関心が大いに高まりました。」

セネガルでは日本に関して「明治以降」の日本について学んでいるのですが、明治以前の「江戸期」については全く学んでいないのです。これは中学校、高校に限ったことではなく、大学でも同様なのです。そのため、セネガルの人々は皆が皆、「資源のない日本が今のように経済大国になったのだから、セネガルも必ず日本のようにになれる」と思い込んでいるのです。これは彼らの日本に対する認識の大きな誤りなのです。つまり、日本の明治維新の礎が江戸期の幕府が行った教育政策にあることを全く知らなかったのですから。R.P.ドーアは「江戸時代の教育」(1970年)の中で、「少なくとも教育の分野においては着実且つ一貫した幾つかの傾向がみられる。学校教育の絶対量増大の傾向とその内容および目的の進化がそれである」と指摘し、「1870年頃には各年齢層の男子の40~50%、女子の15%が日本語の読み書き算数を一応こなし、自国の歴史、地理を多少はわきまえていたとみなしてよさそうである」(「学歴社会」(1976年))とも述べています。

### 仕事上の苦勞と喜び

7)の「経協ツアー」について、村落給水事業でタンバクンダの村に建設した「太陽光発電施設」を訪問した時、村人から大変感謝され、おまけにお土産の手作り民芸品までもらいました。更に、村人から言われ、水が半分ほど入ったプラスチックの桶を頭に乗せて歩くことを試みましたが、二歩ほど歩いたところで、桶を落としてしまい、全身ずぶ濡れになり、村人からは「日本人には無理だよ」と、大笑いされてしまったことは楽しい思い出です。この水道施設(家畜用を含む)は2つの村で共用され、女性たちの大きな負担となっていた数キロ先までの水汲み作業がなくなり、その時間を使って他の仕事が可能となり、若干ではありますが、収入増につながったとのことでした。また、今では当然のこととなっていますが、当時としては珍しい「水管理運営委員会」が日本の開発企業の担当者の提案で設置され、わずかな金額ではありますが、「水道料金」を徴収し、その収益を村の男たちではなく、「女性たち」がしっかりと管理し、管理運営費に充てていることには驚くとともに、感動しました。その他、日本の援助で建設された小学校の教室や漁市場、拠点となっている漁業センターの運営状況なども視察し、広報活動を実施しました。

当時、日本の「経済協力」案件は、どの案件も高い評価を得ていましたが、その中でも、最も日本の素晴らしさが発揮されていたのが、セネガル南部のミシラ村に建設された「ミシラ漁業センター」でした。セネガルの漁業はピログ Pirogue という木造の小型船を使用し、主に沿岸で行われているのですが、ここミシラでは、従来の木造船と比較すると、日本が供与したかなり大型と言える強化プラスチック製の漁船が使用され、遠方まで漁に出かけられるようになっていたのです。加えて、センターには製氷機・保冷庫が設置され、輸送用の保冷車や小規模ではあるものの、船外機の修理・整備工場も備

え、担当者も常駐していました。また、日干しの干物を作る台もかなりの数を備えていたのです。

このセンターができるまでは、このミシラ村には電気が通っていませんでしたが、センター開設による通電によって村の生活が大きく改善されたのです。日本人の専門家 O さんや出勤途中に交通事故で亡くなられた T さんというお二人の漁業専門家は素晴らしいお仕事をされ、そのご努力は大変なものだったと思います。当時、訪問時に聞いたところによると、このセンターの年間売上高は 4,000 万円(セネガル通貨で約 2 億 CFA)超だとのことでした。セネガルにおいては、このセンターは「優良企業」だったのです。商品開発も行い、商品名「TEMPURA」(てんぷら：日本で言えば「薩摩揚げ」に近いもの)を世に送り出していました。私は「これはセネガル人の口に合うのかな？また、価格が高いのではないかな？」と心配していました。私の心配は当たってしまい、後年聞いたところでは、購入するのは殆どが日本人で、量としてはあまり売れなかったそうです。

更に、私が帰朝した 2～3 年後ぐらいから、このセンターの運営は漁業省官僚(センター一長)によるトップダウン方式が裏目に出て、漁獲高が急激に減少したのです。この反省としては、大使館も運営関係情報を常に把握しておくことが必要不可欠だと思っています。更に、生産に直接関わる漁民やセンターの従業員などの意見を取り込んでいくボトムアップ方式に変えていかなければ改善は見込めないことも確かだと思っています。これについては、龍谷大学大林稔教授による外務省「平成 11 年度経済協力評価報告書」の「第 5 章有識者による評価」の中の「4. 西アフリカの漁業振興(セネガル・モーリタニア)」並びに JICA による「セネガル国水産セクターレビュー情報収集・確認調査報告書」(2017 年 9 月)を参照してください。

このセンターでは、近くに自生しているマングローブに付着する牡蠣を首都のダカールにあるアフリカ大陸最西端に位置しているアル・マジ岬まで保冷車で輸送し、セネガル人のオーナーである I さんが彼の食堂で販売していました。ただ、残念なのは、獲れた牡蠣をそのまま、持って来るだけなので、単価は安く、付加価値を付けていなかったのです。しかし、この牡蠣を「養殖」しようという試みが行われ、私が再訪問した 2014 年時点では、かなりサイズの大きな牡蠣が生産されるようになっていました。大使館在勤当時、私は「サザエ」をブランド化する必要があるのではないかと思い、その店にいた T 小母さんに「日本式サザエのつぼ焼き」を伝授しました。それまで、T 小母さんはサザエの中身を取り出して網の上で焼いていたのです。2014 年の私の再訪時には、T 小母さんは「付加価値を付けるために醤油を垂らして、日本式サザエのつぼ焼きでやっているよ」と言いながら、私の目の前で実演してくれました。醤油を垂らしただけで付加価値が付くどうかは疑問ですが、小母さんなりにいろいろ「知恵」を出しながら、売り上げに貢献しているようです。

## 私の生き方

通算3年ほどセネガル・ダカールに滞在しましたが、その間にセネガルの方々から多くのことを教えていただき、学ぶことがたくさんありました。常々大切に思っていることは、「意識して自分の価値観を表現し、相手のバックグラウンドとしている社会的文化的価値観を尊重し、話をよく聴き、観察し、教えを乞う」ということです。言い換えれば「我以外皆我師」です。

日本人の中にもいらっしゃいますが、私を知るセネガルの方々はこちらが話をしている間は、一切言葉を発せず、こちらの話が終わると、自分の考え方などを話し出します。私について言えば、「他の人々の話をよく聞いて、観察する」ことを旨としていると自身では思っていますが、「行動」については、そうではなく、思ったら、すぐに行動してしまう性格なので、失敗も多々あります。

ダカール大学に客員教授として滞在していた時、所属先の研究棟の周囲にはハイビスカスが美しく咲いていたのですが、その下の地面を見ると、たくさんのゴミが散乱していたのです。それを片付けていた時、研究棟総括管理官から「先生がそんなことをしてはいけません。清掃担当にやらせますから」と言われてしまったのです。翌日も状況は変わっていませんでしたので、「自分からやるしかない」とまたゴミ拾いを始めたのです。すると、研究棟の事務官がやってきて手伝ってくれ始めたのです。

数日後、その事務官から「総括事務官が『鈴木先生は我々によいことを教えてくれた。綺麗にしておくことは日本人の価値観なんだよね』と言っていましたよ」と。これは本当に嬉しかったです。まさに、「小事が大事」です。小さな事ですが、これを重ねていくことが大切だと思います。数日後、研究棟の周囲はゴミがなくなっていました。ゴミ問題は殆ど全アフリカに共通する大問題です。だからこそ、環境・公衆衛生に対する日本人の良質な「価値観」、「考え方」を小さな事柄からアフリカで実践することは意義あることだと思います（参考：Le Soleil 紙によると、2021年10月に大清掃運動を実施したそうです）。まさに、カタールで開催されているサッカー・ワールドカップの会場での日本人サポーターのスタンドを清掃する姿 — 中には、「清掃」の仕事を奪うのかという輩もいるそうですが — にほかなりません。選手も試合後、ロッカールームを必ず清掃しているそうです。

更に、セネガルを訪問する度にご自宅や市内の事務所にお邪魔させていただいた著名な作家であるセンベヌ・ウスマン監督は、「アフリカ映画の父」と称され、在セネガル日本国大使館主催のフランス語とウォロフ語による「俳句コンクール」の審査委員長も務めていただきました。同氏には、逝去される7か月前にご自宅で二時間以上にわたってお話を伺いましたが、生前、「日本はこれまでセネガルほかアフリカに対してたくさんの経済援助をしてくれているが、今後は政治、経済などの根底に根付いている当該地域の『文化』をしっかりと研究してもらいたいし、その文化に対するきめ細かな支援をお願いしたい」とおっしゃっていたのが忘れられません。

「文化」に対する支援は今後、重要な視点だと思います。そのためには、高いレベルの方々との意見交換ももちろん必要ですが、私は当該地に居住する人々（庶民）と語り合い、彼らの声をしっかり聴き取る力が求められると思っています。言い換えれば、「国道（大規模な援助）もさることながら、側道（小規模な援助）の重要性」が認識されなければならないのではないのでしょうか。これには優良な『草の根』文化無償資金協力」案件の発掘が重要になると思います。

私は、大学退職後、NPO 法人「八王子国際協会」という組織に参加し、副理事長として理事長を補佐する活動していますが、外国人の方々も大勢いらっしゃいます。ここでは、まさにこの「私の生き方」の最初に述べた「意識して自分の価値観を表現するとともに、相手がバックグラウンドとしている社会的文化的価値観を尊重し、話をよく聴き、観察する」ことが極めて重要な要素となっていると考えています。

セネガルの現大統領であるマッキー・サル氏は国民に向けて「意識を変えなければなりません」とセネガルの新聞紙上で呼びかけました。これから将来に向かって、日本はどんどん外国との交流が拡大していくことは間違いないでしょう。このような日常生活環境の中では、私を含め、21 世紀を生きる日本人には「人生の中で自分が身に付けてきた社会的文化的価値観にプラスして、異文化社会からの異なった『良質な』価値観を自己の中に注入していく」ことが求められるのではないかと思っています。